

令和5年度第1回青森県こども未来県民会議 議事録

(司会者)

ただ今から、令和5年度 第1回 青森県こども未来県民会議を開催いたします。私は司会進行を担当する、株式会社I・M・Sの三上と申します。本日はどうぞよろしく願いいたします。

はじめにメンバーの皆様知事より委嘱状を交付いたします。皆様のお席で交付いたしますので、お名前が呼ばれましたら、その場でお受け取り下さるようお願いいたします。

----- 各メンバーへ委嘱状交付

なお青森県こども未来県民会議メンバーのうち、本日は坂本様が欠席となっております。続きまして、知事より開会宣言をお願いいたします。

(宮下知事)

皆さんまずですね、応募いただいたことに心から感謝申し上げますし、こうして第1回目の会議ができて、私もすごくうれしく思います。

さっき少し解説があったかもしれませんが、今日の新聞にも大きく出ていて、この20年間で20代の若者が半減したという、衝撃的な数字が出ていました。本当は人口相対比で表すべきだと思うのですが、そうすると、どれだけ若い人達の方が減っているかが分かると思うのですが。

ただ、絶対値でもそれだけ減っているってことは、やっぱりこの県が、少なくとも今の時点で若い人たちにとって魅力のない県になってしまっている、ということだと思っていて、そのことに私自身も数字を見て改めて衝撃を受けています。

これからの青森県のことを考えたときに、一番大事なことはやっぱり、子どもたち。今いる子どもたちを大切に育てることが多分大事。ひとつには子育ての分野、ひとつには教育の分野。そういったことを一生懸命やって、青森県内のどこで生まれても同じような環境の中で、青森県内の中で生活ができる環境を作ることと、世界に羽ばたいていける子どもたちを作る、育成して育てていくということが、多分とってもまず大事なことだというふうに思います。

それに加えて、次に大切なのは子どもたちの数というとあれですけどね。どうにかして、生まれてくる子どもたちの数を増やしていけないか、ということをやっぱり考えていかないと、この先ずっと人口は減少して行って、若い人たちがいなくなって、青森県が無くなってしまいうふうな環境に陥ってしまうということだ思うのです。

2040年、2060年までの指標は出していますが、その先のことを考えても、合計特殊出生率が2を切っている状況のなかでいけば、どんどんそれは減っていく訳ですから、本当に消滅してしまうと。

ただ、それをなんとか反転させて2以上にしていく為に、数字にこだわっているわけではないんですけど、2以上にしていって、青森県がこの先もずっと青森県でいられるために、いったい何が必要なのかということも、もう一回真剣に考えていきたいと。

そうした中で、普通であれば、なんとか審議会みたいなものを立ち上げるのですよね。そうする

と先生方がずらっと並んで、各団体の長がずらっと並んでですね。そこで出てくる意見って、ものすごく総合された意見で、まとまっていて、丸まっている意見がでてきてやっていると。それをやるっていうことももちろん大事なことで、全部の県も日本もやっているのですよね。教授が来て、団体の長が来て、いろんな意見が出てまとめて、それを政策にしてやっていくっていうのはずっとやってきたし、これからもやる。

ところが、それでなんにも解決してない訳ですよ。だから私は、そもそもそういうアプローチの仕方を変えるべきであろうというふうに、ずっと前から思っていて。今回知事として就任しましたので、この課題というか、この問題というか、この希望というかですね、達成する為に、新しいアプローチで、こういう審議会とかじゃなくてちょっと応募してみて、皆さんの想いを聞いて、その想いの中から本当に大切なことを見つけていきたいというふうに考えていますので、是非、今日はまず、率直な自己紹介も兼ねた問題意識をお伝えしてほしいと思います。

この先は、各地でワークショップを実施したり、またみんなで集まってそのことを話し合ったりしながら進めていくことになると思います。ここの会での結論は、総合性とかそんなの必要ありません。なんというか、うまくまとめるなんてことは考えないで下さい。本当に皆さんが普段思っていることを率直にぶつけていただいて、それを私たちに解釈させていただいて、政策にしてどうなっていくのかと。どうなっていくのかというか、良くなっていくのかどうか、ということを考え検証して実行して、検証して更にやり直して、そんなサイクルにしていきたいと思っていますので、リラックスをして、いつものみなさんの気持ちをそのままストレートに伝えていただければと思っています。

今日、さっきまで家族と一緒にいて、今日こういう会議があると、全員結果的に女性になりましたと、うちの妻に報告をしてきましたら「パパ今日大変じゃないの！ 頑張ってるね」。すごい大激励を受けてきて、ずっとその手の仕事をしているから大丈夫だよと。何が大変と言ったのか、ちょっとわからないですけど。考えてみると普段、やっぱりこうなんというか、いろんな政策とか、選挙の話もそうですけど、一番率直に厳しい意見を言ってくれたのは妻だったりするし、やっぱり女性の目線はすごく大事だし、女性の目線を超えて世の中を見ていく目線というのは絶対みなさんそれぞれ持っていると思うので、そういったところを、今日は率直にぶつけていただければと思っていますので、よろしくお願ひ致します。

私はこれをほんとに楽しみにしてきましたので、よろしくお願ひします。以上です。ありがとうございました。

(司会者)

続きまして、今回は会議のキックオフとなることから、メンバーの皆様から、お一人5分ずつ程度で、少子化の現状に関わる、普段からの想いですとか、今後の少子化の改善に向けて考えていることなど、ご自身の体験なども踏まえて、お話をいただきたいと思っています。

率直なご意見が欲しいということでしたので。まずは知事の左手側、種田英里香さんから、よろしくお願ひ致します。

(種田英里香 氏)

私は特に、なにも名刺を渡せるような肩書も地位も名誉もない者なのですが、普段思っていることを話しさせてもらいたいな、と思ってきました。書いてきたものをお話しさせてもらいます。

私には1歳と2歳の年子の男の子がいます。その中でもっと子どもを産んで育てやすい環境があればいいな、と思う場面を多く感じてきたので、2点あげたいと思います。

1つ目は子どもにかかる費用です。私は子どもがほしいと思った時に、掛かるお金を計算したことはなかったのですが、実際に産んで育ててみると、ミルク1缶大体平均すると2,300円くらい、それが1週間で無くなってしまいますし、おむつも1パック平均すると1,300円くらいですが、それも1週間で無くなってしまいます。計算すると、1か月に15,000円くらい掛かっています。

児童手当で15,000円貰ったとしても、全部消えてしまう金額なのです。多分政府はこの15,000円を将来の為に貯めるとか、という意味を込めてくれているとは思いますが、ちょっとそれでは足りないです。

あと、私の家は青森県の中でも平均的な収入のおうちなのですが、保育園にかかるお金が1人50,000円です。2人目になると半分なのですが、それでも70,000円くらい、出費としてかかります。子どもを置いて仕事に出ていて、寂しい思いをさせていると思うのに、出費まで多くて、なにかこう、損をしている人生なんじゃないかなと思っていました。

あとは産後の支援についてです。私は実家が近いのもあって、里帰り出産というのはしなかったのですが、生まれてすぐの間は両家の両親が手伝いに来て、ご飯持ってきてくれたり、洗濯を手伝ってくれたりしていました。でもそれっていうのは最初の1か月程度なのです。でも私たちにとって産後っていうのは、たぶん一生続くのです。

泣きやまない子どもをちょっと放置しながらご飯支度したりして、申し訳ないなって赤ちゃんに思うこともありましたが、ちょっと寝たなと思って、出掛けたいなと思っても出掛けられないのです。赤ちゃんを置いて向いのコンビニに行くことすら出来なかったのです。そういうのも含めて、産後の疲れている状態で、ご飯支度して夫の帰りを待たなきゃいけないというのも、すごい負担だと思いました。もう少し産後のヘルパーさんのお手伝いとか、あとお弁当を誰かが持ってきてくれるとか、そういうシステムがあればいいなと思っています。

あとはですね、不妊治療にかかる費用とかも援助してほしいなと思います。

私は今2人子どもがいて、軽の自動車に乗っているのですが、もう1人実は欲しいと思っていて。そうなった時、軽自動車では荷物を置くスペースも足りなくて、本当は乗用車に乗り換えたくて、でもお金がかかると思うのです。なので、3人目産んだら一束100万円ドーンとか。ドーンしてくれるような支援があったら、つわりとか辛くても自分で育てる元気が出てくるので。すごく恐れ多いなと思いますが、知事にお話しさせてもらいましたので、よろしく願います。以上です。

(宮下知事)

使い方がよくわかりました。児童手当の考え方っていうもの考えたことなかったし、いつも思うのですよ。だから本当に1人生まれたら100万と言わず1000万くらいとかっていう議論もあるわけですよ。将来、子どもたちが税収を上げてくれるから。それをペイ出来るかどうかみたいな話があつて。

そうか、使い方として車を買ひ替えるとか、3人目だと車を買ひ替える。で、あのもう一つは、預け先、いってみればちょっと預けるっていうのは、今は保育園に通っている？

(種田英里香 氏)

今は保育園に通っています。

(宮下知事)

その通っている前の段階か。

(種田英里香 氏)

ちょっと預けたい、ちょっとシャワー浴びに行きたいとか、それだけでも見てくれる人が居れば多分違うと思うのですよ。お母さんほんとに時間なくて、お風呂に入る暇はないと思うのですよ。そこを見てくれる1時間とか、2時間でもご飯作っている間、相手してくれるとか、それだけでもすごく助かるのですよ。

(宮下知事)

わかりました、すみません。私も面倒見ていなかったのも、とりあえず謝っておきます。わかりました。ありがとうございます。

(司会者)

ありがとうございます。それでは、亀山瑠香さん、よろしくお願い致します。

(亀山瑠香 氏)

よろしくお願い致します。

(宮下知事)

大丈夫です、自然で大丈夫です。

(亀山瑠香 氏)

おいらせ町から参りまして、三沢市の方で働いております。遠いんじゃないかなと言われてたりしますが、意外と1時間から50分あれば今は来られるような状況なのですけど、すごく素敵なお話を聞かせていただきまして、私は一般的なそのような家庭ではないのかな、というところからまずお話をしたいのですが。

私は青森県三沢市出身で、大学は音楽を専攻しまして、東京の方で勉強しました。その後大学院というか留学をしてウィーンの方で勉強してまいりまして、そちらで音楽活動をしていたのですが、その後日本に帰ってまいりまして、結婚を一度しまして、男の子を1人産んだのですが、それが10年以上前になるのですが、今小学校5年生になりました。

私はですね、子どもが幼少期、小学校に入る前に、離婚を私の方からしました。ちょっと気が強いので、今は会社を2つ自分で立ち上げて経営しながら、音楽振興とか、芸術文化の振興ですとか、そういった地域がよくなることを。その他、若い経済人が入るような経営者団体ですとか、そういったところで地域が良くなる活動をということで、日々、忙しく毎日しているのですが、そんな中で、子育てですね。

シングルなのですが、実はそんなに私は苦労したなっていう記憶がないんですね。そんなに。子どもも全然。小学校に入る前くらいまでには会社を立ち上げていたのですが、家でできるように、音楽なのでうまくやって、小学校1年生くらいまで家にいました。幼稚園に通わせてそのまま2時3時に帰ってきてっていう形で。それでも仕事をしてという形で。

多分違いとしては私の家族が、母がとても協力的に今でも助けてくださっているところだと思うんですね。そこで思うのが、家族の助けがもっとある。気軽に。

お母さんになったのだから、やらなければならない。でもうちの母が言ったのは「あなたの人生なんだから、子どもの人生も大事だし、あなたの人生も大事だし、あなたは私にとっての子どもだし、きちんと頑張してほしい」ということで、今でもずっと手伝ってくれています。仕事にはどうぞ全部出てくださいという感じです。

自由な働き方を、自分で会社を立ち上げて、自分で従業員を雇用して働いているおかげで、参観日ですとか、子どもが参加する親子レクですとかそういったもの、子どもに関わるものにはなるべく全て参加することが今でも出来ています。ただ、もちろん働いているので寂しい思いはさせているかもしれないですけども、その点は家族ですとか、兄弟ですとか、みんなで助け合える状況であります。

なので、今日ここで申し上げたかったのは、私は結構幸せだと思っていて、県内でも、いろんな家庭があると思うのですけれども、ひとつひとつの世帯ですとか、お母さん一人ひとりが幸せだと思えば、自ずとお子さんを産むのじゃないかなと、私は独り者ですけど思っています。

仕事の内容が教育関係の会社と障害児の福祉の会社を2つやっております。教育をやっている思ったのが、子育てをする家庭ですね。産むのは、たまごクラブとか読めばわかるのですけれども、その後どれくらいお金がかかって、どういう教育をしていって、どういう所に預けてっていう、その学ぶ場所がないのかなっていうのがあります。地域差があると思うので、学べるような情報を得られるような何かがあればいいのかな、というふうに考えております。

あとは、今は育児休暇の取得とか、うちの従業員達も女性の方が9割方しているのですが、男性の育児休暇につきましても、男の人も教育や子育てについて学べる場があれば育児休暇の意味があるのではないかと考えております。ありがとうございます。

(宮下知事)

今の話で、学べる場っていうか、子育ての方法論とか、どうしたらいいのっていうのは、県と

いうよりは市町村がサポートしているっていう体になっているのですが、何年か前から、子育て支援の包括ケアをする為にそれぞれの自治体にセンターを作って、0歳児から18歳までのサポートをする。ニューボラみたいなことをしましょう、みたいな話で。保健師さん達が寄り添ってやっているっていうふうな建付けになっているのですが、そういうサポートは日ごろ感じることはありますか？

なんでそこに乖離があるのでしょうかね。われわれいつもそうなのですよ。予算は付けた。やっているはずだ。届いていない。あるいは出来ていないという所に、なんのあれがあるのでしょうかね。公的なサポートなんて基本的にはあまり気にしてないっていうことなのですね。

(亀山瑠香 氏)

そうですね、あまり私自身も思いませんし、教育なので会員さん300人近くいるのですが、みなさん行政ではなくて、まったく関係のない方の会員の方のうちに聞きにきたりするので、ちょっとしたことでも、やっているのはわかっていたのですが、行き届くといいなと思いました。

(宮下知事)

ちょっと育児休暇の話で。たしかに、男性が取ってる率が少なくて、やってないというのがその通りだと思うんですけど、男性が仮にどんどん取れるようになった時に、どれくらい一番男性に期待していますか？ 別に誰でもいいのですが。

(回答者※複数人)

家事、育児休暇じゃなくて家事をやってほしい。家事休暇。家事をやってくれれば。おっばいはあげられなかったりするのです。

(宮下知事)

それはそうだけ。

(発言者不明)

自分が育児に集中できるように主人が休暇を取って家のことをやってくれるのが、一番。半年取ってもらいましたが、すごく助かりました。

(宮下知事)

半年取ってもらって、いろいろやってもらって一番なにやってもらいました？

(回答者)

料理です。

(宮下知事)

ちょっと自分の反省言っているですか。今の話で、長女が産まれた時に仙台で、たまたま管理

職だったのですが、管理職だから早く帰ることも結構大事なポジションだったので、6時か7時には家に着けて。ちょうどその時、生まれた子だったので。育休は取らなかったのですが、例えば食事を作るのがちょっと苦手だったので、お風呂一緒に入れていましたし、その程度かよって思ったかもしれないけど、お風呂は必ず一緒に。それから夜泣き、結構夜泣き、最初は半年から一年は結構あった。夜中は寝たと思っておろすと泣くから。背中スイッチ。それで、それをやったりとかくらいはやっていたのですが、それでも結構自分ではやっていたつもりだったので。まあ多分、全然多分参画していない。それよりも、それ以上にその後ダメだったので。よ。

その後東京に戻っちゃうと、今度はですね、夜中の2時、3時まで仕事だったので。だから全然帰れない。でも、土曜か日曜のどっちか休みだから、休みの日は一日中一緒に連れてって、家内が自分の好きなことをするかっていう。ところが、むつに戻ってきて、青森戻ってきて市長になったじゃないですか、ちょうどその時長女が小学校入るときですね。入るときに戻ってきて、次女が次の年生まれて、ここからほんとになんにもしてないです。なんにもしてなかったから今どうかっていうと、やっぱりちょっと遠くなりましたね。子ども達と距離が。未だに中三の長女に言われるのが、「本当に話聞いてほしい時に全然話聞いてくれなかった」と。

いつか一緒に酒飲もうよという気持ちではいるけど、そんな話も今は出来ないし、下の子なんかほとんど関与しない。関与できなかったのも、それがね、何て言うのか、反省というより、自分がかっかりしているのですよ。ホントに大切な、長女の方は小学校上がるまで、遊びにもよく行くし、お風呂にも入れたり、触れ合うコミュニケーションもずっとしてきたので、すごい仲よかったのですよ。一緒に手をつないで学校に行くくらい仲が良かったのですが、もはやその空白の6年か7年で一切そういうのなくなったし、次女の方は、ゴールデンステージを過ぎた記憶がまったくないのですよ。今たまに見て、おっきくなったねって、親戚のオジサンみたいな感想言っちゃうくらいで、でもこれって男性側にとってはものすごく損している感じがしてですね。もったいなかったですね。

でも、これをなんとか皆さんにというか、男性に伝えたいですよ。最後この段階になって後悔しても遅いからね。なんの話でしたっけ。育児休暇。家事休暇。育児の中に家事も入っているから家事でも簡単に休めるようにしないとイケないですよ。

本当に大切なことは、その期間だけじゃなくて、例えば産後8週間、育休の3年間だけじゃなくて、子育てに携わるときに、簡単に休みを取れるかどうかのような気がする。本当にそんな気がする。なんかすいません、感想みたいな感じになってしまいましたが、私はそう思っていますということだけを伝えておきます。

(司会者)

山内さんお願いします。

(山内優 氏)

よろしく申し上げます。私は小学校2年生の双子の息子と5歳の娘がいます。名簿の方に※印が書いてあって、なんの※の団体だって思うかもしれないですけど、市内で小学校の教員をさせ

ていただいています。折角※印がついているので、現場の声というか、そんなものを全面に押し出してお話ししていきたいなと思います。宮下知事がやりとりで私の本音を引き出してくれるかなと他力本願で臨ませていただきます。

勤務している小学校では、5年間で150人くらい、700人いたのが540人くらいに減っています。すごく体感として減っているなど感じています。卒業する人数よりも、入ってくる人数がすごく少ないです。さらに特別支援学級の数が増えているけど、教員の数は変わらないというところではあるのですが、すごく減っているなどというものを感じていて、転出入の多い学校なのですが、やはり転出の方が多いです。入ってくるのは少ないなど実感として感じていました。

公務員なので、給付金。休んでいる時の給付金もがすごく良くなってきていて、お給料と同じくらい貰えるので、事務の方から、もう1人いけばと、言われています。自分の時、5年前の時はそうでもなかったのが良くなっているのだと思うのです。3人もいるのでいいです、とって笑い話にしているのですけど。

あとは、昨年度、男性の先生が3か月の育児休業を取りました。その時に青森市役所の方も育児休業を取ったとニュースになっていて、うちの職員の方がすごいよと。3か月だし、取材に来ないかなって言っていたりしました。認識として進んでいるなど公務員だからなのかなと、すごく感じています。ただ、実際に取るかと言われると、3か月抜けた代わりに先生が来ないのです。そうなった時にやっぱり、いる職員で回していかなければならないとなると、ぎりぎりでスタートしている4月。さらに減るってところで、暗黙のじゃないですけど、言いづらさがあるのかなと。やっぱり取りたいけれども、校長先生にまで相談に行けないとかって。さっき政策はあるのに、という話をしていましたが、ちょっと壁があるっていうのはそこかな、と話を聞いていて感じましたね。

あとは、私自身の話になるのですが、双子は1人車いす使用です。誰しものが、健康な子どもを産めるわけじゃないってところでは、私も週1回お休みをいただいて、有給を削って削って、通院をしています。私は結構あつかましいので、制度としてあるでしょと言ってとっていきますけど、取りづらい方もいっぱいいると思います。雰囲気づくりとか、管理職の意識の持ち方ってところで変わってくると、さらに子育てがしやすいのかなと感じました。以上です。

(宮下知事)

なんか学校現場ってむしろ取りやすいのかなって思っていましたけど、どうなのでしょう、学校ごとに違うイメージなののでしょうか。

(山内優 氏)

私みたいに制度があるのだから、使っていけばいいじゃんという、厚かましさが必要ですかね。

(宮下知事)

それはでも当たり前のことだと思うのですが、なかなかそういうふうにはいかない。

(山内優 氏)

それこそ子どもが熱出すのも、夏休みじゃないから。授業があるときに、自分の授業があるときに子どもがコロナになってしまうと、おじいちゃん、おばあちゃんを召喚したという声はすごく聞くんですけど。

(宮下知事)

教員不足との関係でもそういうことは感じますか。自分が休むと、さっきの話の中でも、自分が休んじゃうと大変なことになるみたいな話はしたと思うんですけど。

またこれも話が長くなるのですが、私いつもですね、一応市のトップだったじゃないですか。県庁では、そういうの、誰がどうなっているかってまだよくわかってないので、やってないんですけど、必ず年に5人くらいいるかな。500人くらいの職場なのですね。5人くらいは産休か育休に入っているのですよ。年に3人か4人くらいは育休産休に入ります。しばらく育休もあるからってことで、一応市長にあいさつに来てくれるのです。お腹大きくなってから。

私その時いつも、東京の水天宮でお守りをまとめ買いして、渡してあげるのですよ。これもらうと今まで100パーセント安産だからってあげて。その時に加えて言うのは、もう気にするな、こっちはこととはと。ある意味大きい所帯なので、ともかく確かに公務員として、市民の為にいろんな場面で一生懸命仕事をするっていうことは大事なことだけど、それよりも今やっぱり、それよりもやっぱり、子どもをちゃんと元気に産んでもらって、その子がむつ市とか、あるいは青森県の為に、日本の為になる子に育ててくれたほうが、むしろ大事だから。期間はあまり考えずに、悔いのない期間で育休とって、無理して自分の今のところが忙しいとか、いろんな周りがなんか1年しか取ってないから、自分が1年だってことじゃなくて、別に1年取ってまた出産に入って何年という形になったとしても、そっちの方が大事だから。

もうひとつ言うのは、取り返せると。20歳から30代で仮に産休とか育休で5、6年休んだって40年働くわけですよ。だから絶対取り返せるから。いろんな意味で給料もそうだし、昇任とか昇格も取り返せるし。現に取り返せている女性職員もいるから。とりあえず育休産休、頑張っただけという話で。送り出しちゃう。まあ結構。いい上司ですよ。

いや、それはさておき。でも、そういうふうにはトップがならない限り、たぶんそこは良くなる。どうですか？

(山内優 氏)

でも休んだ人の仕事はトップはやらないじゃないですか？

(宮下知事)

すみません。やらないのですけど。何が出来るって言って言ったら、人の配置はできるので。

(山内優 氏)

そういうところで、人の意識っていうか？

(宮下知事)

そうなのです。だから、本当はその、教育の現場でいけば、やっぱり学校だけじゃなくて、教育委員会もそうだし、あとはやっぱり思い込みなんですね。教室に1人先生が居なきゃいけないとか。あるいはその授業にはちゃんと先生がつかなきゃいけないっていうのは、結構思い込みの部分もある。それ全部はオンラインにはならないにしても、あるいはサポーターだけの時間があったらいいし、いろんなこう仕組みを変えれば、もっと取りやすい環境が私はできると思っています。

今日答え出さないで、ごちゃごちゃ言っていますけど。本当そう思っています。それくらいにしておきましょう。

(司会者)

はい。続きまして越田さん。お願いします。

(越田安耶子 氏)

えっと。私はですね。※印がついている一人なのですが。NPO法人あおもり男女共同参画を進める会から来ました。

私はですね、みなさんとは違う、違うわけではないですが、結婚はしています。だけど持病がある為、子どもを産むことができずに、諦めました。養子をもらおうかな、ということも考えたこともあったのですが、根本的なところで言うと青森県の最低賃金がとても安すぎる。そして、その将来、子どもをじゃあ養っていかうかって考えた時に、もうやっっていけるのかと。じゃ里子をもらったところで、その子を本当に幸せにできるのかな、という部分もあるのでまずは最低賃金を上げてほしいなっていうところがとてもあります。

あとは少子化対策に成功していると言われている、フランスとかハンガリーとかですね。そこでは不妊治療の無償化が行われていて、私の友人でも結構、何回もやってもすごい費用も掛かって。けどちょっともう金額的には、となって保険適用にはなっているのですが、それでも金額はやっぱりかかるので、もうそれだけだとやっっていけないから、もう諦めるしかないっていう方もいらっしゃると思います。

あとは、私が一番ちょっとここで伝えたいなと思っていたのは、子どもを産んで育てるっていうのは結婚している人たちだけのものではなく、女性1人で産み育てたいと思っている方もたくさんいらっしゃると思います。そして、事実婚とか同性婚っていう形でも認めてほしい。それでも子どもを産んで育てていきたいっていう方もいらっしゃるの。こういう方たちのことも含めて、ちょっとこの会議で皆さんにあの意見を、いろいろと聞きながら、というか、あの出していただけたらなというふうに思っております。

あとですね、私はちょっと人権男女の方から言わせていただくと。LGBTQですね。性的少数者の方たちも子どもを産んで育てることはできますし、そうしたいって思っている方もたくさんいらっしゃる。そういう少子化対策に成功している国では、そういう方たちも認めていますし、そういう方たちが子どもを産んで育てるっていうことに、国で支援しているところもありますので、ぜひ私は青森がそういう人たちにとって、オープンでとても住みやすく海外からで

も県外からでも移住して青森に来て、住みたいって思えるような、県になっていただきたいなと思います。

最終的には青森県の、さっき知事がおっしゃった人口減少にこう、ストップできるようなものを考えてみたいなというふうに思っております。はい。以上で終わります。

(宮下知事)

今日はスタートなので、まあ、いろいろとちょっと触りのとこだけ話しますが、まあ賃金の話は確かにその通りで最低賃金だから、それが出生率、それが、相関関係があるかどうかわからないですけど。ただね、私思うんですけど、なんで、そのもっと所得が低かった、その戦前とか戦中とか、戦争直後っていうか、戦争直後とか一番多かったのですよね。合計特殊出生率が4を超えていた時期があるわけです。

その時って別に所得って、そんなたぶん高くなくて。ないけど、みんな子どもたくさん。出来た、産んだ。平均が4とかっていうことなので。まあ、自分の祖父とか祖母の時代と見てみると、やっぱり兄弟7人8人いるってなんか普通にあったような時代だった気がする。

確かに所得と、その無償化っていうのは、一つの大きなあのテーマではあるんですけど、必ずしもそれだけではない。預けやすさとか職場の理解だとか、やっぱそういうことも総合的にやっぱりやっていかなきゃいけないというふうにまず思っている。

不妊治療っていうのも、これは一つ大きなテーマとされていて。こんなに子ども少なくなって産んでいただける方が少なくなっているのに、どうしても産みたい人に対するサポートが、果たして金銭的な、あるいは技術的なサポートが本当にこれだけでいいのかっていうのは、私もそう思っています。やっぱりすこしテーマとして挙げていきたいと。

もう1つは、そのやっぱり結婚しなくても子どもっていう選択肢もこれは多分あるんだと思います。それに加えてLGBTQの話も出ましたけど、青森県の保守性ってこの対局にあるよね。今の環境って多分。

そういうのってすごく、たぶん先進的に進んでいるのって、アメリカだと東海岸で、ニューヨークだとか、ニュージャージーだとか、そういうところからスタートして、今度、西海岸のサンフランシスコとかロサンゼルスとか、そういう本当は大都市の一部のエリアで、こう認められるようになっている。

私がニューヨークの総領事館に居た時に、2012年だったと思うんですけど、初めてニュージャージーで同性婚が認められたのですよ。それを皮切りに全面で今広がって、まあ、ほとんどの州で多分できるようになっているのですが。まあ、田舎だと地方出れば出るほど、それが認められなくなるし、理解がやっぱり進まないっていうのも現状としてはある。

私その時からよく研究したのですが。意外とそういうLGBTQの人達が仮に子どもをすることはもちろんできるし、養子をとった時に、子どもが幸せになるみたい。そういう研究結果も出ているのもよく承知をしていて、ひとつ大きな、ともかく結婚をしなくても子どもっていう話は、一つ大きなテーマなのかというふうには、私自身も感じていますので、そこはちょっと突き詰めて考えていきたいと思います。ありがとうございます。

(司会者)

はい。続きまして牧野さんお願いいたします。

(牧野晴子 氏)

私は、まず知事にお礼を言いたいです。冒頭にありましたけれども、ほとんどの会議が有識者の会議ということで、私たちの意見をなかなか上の方に伝えられない中、本当に一般市民の意見を聞いていただきましてありがとうございます。まさか自分が本当に来ることができるとは思っていませんでした。

私自身のことをお話させていただきます。子どもが4人おりまして、上から高3、高1、小6、小2です。2年前は幼小中高に、全部の学校に在籍する子どもをもっておりました。今はお姉ちゃんなんですけど、大分お手伝いをしてくれるようになりまして、助けられております。

私自身は青森市内の認定こども園で幼稚園教諭をして働いています。今年度は年中組の担任で、23人1人担任。補助の先生は手伝ってくれますが、その中には、先ほどもありましたけれども支援が必要な子もいますし、みんな個性豊かな子たちばかりと、毎日毎日楽しく過ごさせてもらっております。

今回ですね、応募させていただいたのはいろいろ思うところがありまして。当初私は結婚を機にまあ、子どもが好きだっていうのがあって、もともと子どもを5人ほしいなと思っておりました。途中、ちょっと流産したりとか、いろいろ都合がありまして、年齢的になど、そういうこともありまして。

最初結婚した時に自分と主人とで一緒に子どもに関することで勉強したいと保育士の資格を独学で取りました。当初は全然関係ない仕事をしておりまして、それからしばらく高等教育機関で働いておりました。その際に、子どもを産み育てるにあたり辛い思いをしたこともありまして。

例えば出産。妊娠してお休みがほしい時ですね、まず「産むのか」と言われたことがあります。産むか産まないかは自分の選択で、もちろん産みましたけれども、気持ちが前向きになれない方もいらっしゃると思います。

それから育休を取得するのは、今はだいぶよくなりましたけれども、育休ももちろん取れず産後6週で復帰しています。私の希望ではなく、会社的に回らないという。やっぱり先ほどもお話がありましたけれども、教育に関係する先生たちってというのは、自分の持っている仕事を他の先生に、ということも難しいこともあって、そういうふうにお子さんほしいけれども難しいという環境のなかでも、陰でこそこそ、いつも話しあったりしておりました。

もちろん子どもは、先ほどもありましたが、熱を出したり通院したりということもあります。私自身も4人のうち一人は障害児と言われる自閉症、ADHD軽度知的障害の子をかかえております。だからと言って4人の中で1人だけ特別なわけではないですけれども、やはりこう、そういうところに時間を割くということはあるので、そこは世の中の理解をいただきたいと、まあ、あの、自分の子どもの事は隠さずに、みんなに発信して、どんどんそういう、こう、子育てを応援していただけるような。あの、世の中に好転していただけたらと思います。話したいことはいっぱいあるんですけど、以上です。

(宮下知事)

有識者じゃないっていうふうに牧野さんおっしゃっていただきましたけど、私は、県民みんなが有識者だと思っていて。

こういうのがあるのですよね。どこのフランスの政治学者だったか、なんだか研究したのですよ、あ、イギリスか。

こういう話なのです。ある村に牛を飼っているのですけど。そこに牛の専門家がいて、牛の体重この一頭の牛みたい一番おおきい牛だったのですけど、これ何キロぐらいありますかっていうふうに聞いたのですよ、ある人が専門家に。専門家は、まあだいたいこれぐらいですと答えた。

一方で、村人たち、牛の専門家ではない人たちに、2～30人聞いたのですよ。で2～30人聞いて、この牛だいたいどれぐらいの大きさだって聞いたのですよ。で、まあ測るじゃないですか。

確かに、その専門家が言ったのは、近かった。その牛の体重に。ところが30人聞いて30人平均とった重さの方がほぼぴったり。一人一人はすごくばらつきがあるのですよ。

例えば540kgぐらいの牛だとして、村人たちは520って言ったり、500って言ったり600って言ったりするわけですよ。30人はバラバラなのですよ。でもあの学者の方は大体これ530ぐらいで10キロぐらいしか差がないわけです。一人一人の村人たちはこうなんていうか、すごくばらつきはあるのですけど、平均とると学者より優れていたのですよ。

これがね、集団知っていうのですけど、これはね、やっぱり県民の力を結集すれば、有識者なんて目じゃないです。だから、気にせずに自分の考えていることを言ってください。ありがとうございます。

(司会者)

ありがとうございます。小山さん、お願いいたします。

(小山悠里 氏)

小山悠里と申します。よろしくお願ひいたします。私は普段子ども2人、男の子で、三歳と一歳の息子を育てておまして、3年前に夫の転勤で青森に参りました。現在、キャスターの仕事に復歸しまして、現在、NHKのキャスターとして、月2回、「こそだてだより」というコーナーを自分で企画していろいろネタをとってきて取材してっていうことをしております。いろいろ私の拙い知識なのですけれども、いろいろ考えたものをちょっと、お伝えさせていただきますと。

私自身は少子化が進む背景としては三つの問題があると思っていて、経済的な問題、キャリア的な問題、物理的な問題が大きいと思います。

経済的な問題に関しては、まず私自身もう生まれてから不況な世の中しか見たことがない世代で、企業もなかなか内定を出しにくい時期に就活した経験があるのですが、本当に自分一人が生きていくのがやっとという人も多いような時代だと思います。子どもをこの先何年、何十年養っていかなければならない。何千万円かかると言われるたびに、子育てそのものに腰が引けるといふ若者も多いと思います。

ですから手当というのが不安を払拭するにも現実的にも重要だとは思いますが、その手当さえも充分とは言えない現状です。本来ならば保育料、授業料、食費、医療費、感染症が流行をして毎月のように毎週のように、私は小児科に通っていましたが、0歳から18歳までは無償化してほしいと思います。所得制限を設けずに、全世代に同じように支援してほしいと思っています。

さらに若者が子どもを産み育てる環境を作るのが、やはり雇用も大事だと思うのですが、若者が働きたいと思う仕事、十分な給料が得られる仕事は、特に青森においては少ないように感じています。私自身、前は名古屋に住んでいたのですが、名古屋には、ほんとにいろんな産業が、工業があって、若者が愛知から出たがらないっていう、良くも悪くもそういうふうな声を聞いたりもしています。実際に私自身も青森に住んでいると、青森が好きだという若者の声をよく聞くのですが、じゃあ青森で就職するかっていうと、みんな東京とか仙台の方に行ってしまうというのが多いと思います。

新卒の若者を積極的に十分な給料が得られる安定的な仕事につけるように、経済対策も合わせて行っていくことが必要だと思っています。

そして2つ目、キャリア的な問題に関しては、今や仕事って女性にとって、ほんと生きがいで、すし、キャリアを大事にしてみんな生きていく人って、すごく多いと思います。一方で妊娠出産というのは、どうしてもそのキャリアを中断してしまう。私自身も28歳の時に妊娠して29歳で出産して仕事から離れていたのですが、育児しながら、いつかは私も働けるのかなと、テレビを見ながら漠然と不安になることも多くありました。企業などで育児の経験もキャリアとしてカウントされるように、社会的にもっと育児をひとつのスキルとして見る仕組みを作してほしいと感じています。

子どもがいる女性、育児に空白が生じてしまうと思うのですが、そうした女性を企業としても時短勤務にしなきゃいけないとか、色々リスクはあると思うのですが、積極的に採用する仕組みも作ってほしいと思います。事実として、育児というのは常にマルチタスクで、いろんなことが常に起こっていて、感情のコントロールも必要で、多くの人が子育てを経験することで自分の成長を感じる部分も多いと思います。

育児をして組織に戻ることができれば、若手の育成に加えて離職する若者も少なくなることも考えられますので、組織にとっても利益が大きいのではないかと思います。

3つ目は、物理的な問題なのですが、育児をもっと社会全体で支えられる仕組みを作ってほしいと思っています。先ほど申し上げたように、働いている女性が多いので、今後、育児と仕事が増えます両立しやすい世の中にしていくことは必須だと思います。

ただ、現状としては県内のこども園などは比較的入りやすいのかもしれないのですが、それでも人気保育園は倍率が高く、また、風邪を引くと病児保育の枠もかなり限られています。青森市でたぶん20人ぐらいなのですけど、本当に少なく、仕事を休まざるを得ないのが現状です。ファミリーサポートという仕組みもありますけれども、これは一部の市町村に限られていて、弘前などやっていない自治体もありますし、子育てサポートの団体の方を取材して、本当に皆さんに限られた人数でやってらっしゃるので、取材を断られてしまうことも結構あります。

子育てサポートをしている団体も人数も、本当に少ないのが今の青森だと思います。ですので、

県が主導して、こうした団体を増やしたり、活動資金を積極的に提供したりすることも大事だと思います。サポート体制をより拡充して幼児保育の枠も増やすことも必要であると思いますし、ゆくゆくは、将来的には県内ほとんどの企業に企業内託児所を作ってほしいです。そうすれば子育てしていない若い子にとっても、子育てというのが身近なものになっていくと思いますし、初めて知ったということも、そうした子どもが近くにいればたくさんあると思うので、身近な子育てが本当に身近な世の中になっていけばいいなと感じています。はい、ここまでです。すいません長くなってしまいました。ご清聴ありがとうございました。

(司会者)

ありがとうございます。つづきまして、田中さんお願い致します。

(田中綾乃 氏)

南部町から今日来ました田中です。意外と遠くて2時間ぐらい子どもたちと一緒にドライブして来ました。今日すごい楽しみにして来たのですが、私は以前、鳥取県の方で子育てをしていて、青森での子育ては今、丸4年したところです。子どもは9歳と6歳と1歳の子どもがいます。

託児が同じスペースっていうのがすごくいいなと思って。原則未就学児でということだったのですが、県のリーダーにでもこうやって意見を言っているのだからよってということを見せたくて、9歳の長女も連れてきました。ありがとうございます。

なんか今日5分間っていうことで綺麗にこう話すこと考えてきたのですが、ちょっとなんかどっちかという、なんか総合的な意見よりも具体的なものの方がいいのかなって思ったので、私が青森県に来て、これに応募した理由でもあるのですが、4年間で一番思っていることが、みんな全然、子育て楽しそうじゃないなっていうのが、すごくあります。

私が、以前住んでいた所では、みんなすごく楽しそうにしていまして、私は今もなんか日々すごいまあしんどいけど、楽しいのほうが大きくて、この違いはなんなのだろう、っていうのはすごく考えていたのです。で、ちょっと元々話そうとしていたのは、預け先の少なさと、公園がなくて遊びに行けない。あと冬季に屋内の遊び場が、選択肢がないっていうことと、あと子どもの体験の機会も少なさっていうので、各地域、むつ市もされていると思うのですが、そういった現状を聞きたいなと思っていました。

今日は、それは置いて、さっきのファミリーカーの車の事で言うと、2年前くらいかな、自治体覚えていないのですが、子どもを3人目出産したら、無条件でファミリーカー貸し出しをしますっていうのをされている自治体が今あって、そういった取り組みも実際ありますよっていうことだったりとか。

あとは育休の問題だと、どうしても男性育休を進めていきたいと思いますというのが、よくフォーカスされるけど、女性もやっぱり一年休みたいって言って取ったのに、職場から電話がかかってきて、まだ帰って来ないの？と。結構みんなそうやって、予定より早くでますとかって、しちゃっているんですけど。

私はそれが結構、なんで？と思って。多分一番可愛い時期を自分で見たいと思って決めて言っているのに、結果的に周りからの圧力で、それが叶わない。それってすごく、こう、知事おっし

やったように後から取り返せない時間なので、それが気に入らない。

私は夫婦でサラリーマンは辞めてこっちに来てから農家をしているので、今一番下の子はまだ1歳8か月で、家でみているのですが。農家でさえも、園からいつから預けるの？と、すごく言われるのですね。2歳まで見たいって言っているのに。農家はちっちゃい時から預けるのが当たり前の雰囲気があって、私は、たぶんこっちにきて一番のストレスはそれです。

なんでそんな、みんなから言われなきゃいけないの。って。不満を言いに来た訳ではなくて、私が以前住んでいた鳥取県は、2歳まで子どもを家庭で育てている家庭に対して、無条件で月々2万円分のお金がもらえる。その2万円が子育ての資金を賄っているかということ、そこは疑問だけど、でも町の姿勢として家で子どもをみることを歓迎してもらっているっていう、そんな感じでしたのですよ。

そういった、子どもとちっちゃいうちの時間をなんか満喫していいんだよっていう、姿勢を示してもらっていたことが、すごくなんか救いだったので、そういうの、どうですか？

あとはそうですね、私自身が今子育てを楽しめているのは、なんでかなって考えたらたぶん、子どもがいると、なんか美味しいところを結構味わっている。ちっちゃい赤ちゃんを連れて移住してきたから地域にすんなり溶け込めたりとか。知らない人が優しい声を掛けてくれたりとか。子どもがスポーツを始めた。自分がキャンプに行きたくて子どもがキャンプに休みの日行ったら、偉いねって褒めてもらえたりとか。子どもとの時間を大事にして偉いね。

だから、子育てってしんどいところにすごい目がいきがちだけど、もっとなんか自分の日々が楽しくなることが子育てだと思うので、そういったことを感じられる、青森県になったらいいかなと思っています。

私は正直、農業をやりながら自分の子どもをゆっくり育てようって思ってきたのですが、ここにいざ来てみると、なんかもうそれだけじゃじっとしていられなくなって、子どもたちの遊び場イベントをやったり。

(宮下知事)

30日に南部でやるの？

(田中綾乃 氏)

すみません告知になっちゃったけど。みんな楽しくなさそうだから、もっと楽しくしたいという気持ちがあって。もっとなんか、子育て支援も、負担を減らす方向にばかり県が力を入れるのではなくて、もっと青森発信で楽しさをつくっていく。もう一人産みたいなってそういうところにちゃんとお金をさいて、新しい政策だったりとか、取組みをやってほしいなって思います。アイデアを渡します。

(宮下知事)

それは、大事なことだ。

2人にもいろいろ言いたいんだけど、ちょっと我慢する。4人目にいつから。

(司会者)

はい、ありがとうございますでは、和田さんお願いします。

(和田和恵 氏)

東北町から来ました、和田と申します。職業は県立高校の教員をやっていて、教育関係者の方が、いっぱい参加されていて、すごくさっきもわかるなって、聞いていました。

私は今3年生の担任をしていて、進路で今忙しい時期です。1年生の時に結婚をして、私今34歳になるので、子どもをちょっと考えなきゃいけないなと思ったけれども、担任もっているし、正直遠慮したところもあります。

生徒はもちろん可愛いし、最後まで見たい。でも自分の年齢とかを考えると、悩みました。産休や育休で穴を開けると、やはり職場に迷惑がかかる。私の代わりは確かに居ます。別に私じゃなくても、担任はできると思うのですが、やっぱり1人抜けるってなると、現場もやっぱり疲弊感というか、そういうのがすごくあるなと思っています。

私がこれに参加しようと思ったのは、やっぱり、自分の意見をきちんと伝えたり、きちんと伝えたりしていくことが、主体的に動くことが大事だって生徒に伝えているので、そういう姿勢を生徒に見せたいなっていうことと、あと、いい状態で子どもたちにバトンタッチをしたいっていうふうに私は思っています。

今の状態で行くと、多分悪い状態で子どもたちにバトンタッチしてしまうので、そういう状態では子どもたちに青森県を引き継がせたくないなっていう気持ちで参加しました。

先ほどの話でも、子育てをされている方が苦しそうだっていうことだったので、実際に教員をやっていて私もそう見えています。なので、正直、なんかこう子育てをしている先生に憧れないです。

私も子どもも欲しいけど、見るからに忙しそう。学校を足早に出て、帰ったら家事育児で夜寝るのも遅い。朝早く起きて子どもの支度をして、仕事に出る。で、また家に帰ったらっていうのを繰り返しのようになっていて、正直、私はこの状態で子どもを持つという選択をするのは苦しいなと思っているところです。

なので、やっぱり私を含め子どもたちも、これからの子どもたちも、子どもを持ちやすい、持ちたいと思った時にもてるような、青森県になってほしいなと思っています。なので、例えばですが、私の職場は1人減るとやっぱりこう苦しいってところがあるので、私が例えば産休に入ったら2人来るとかね。産休入ったら2人も来るじゃん。みたいな。

(宮下知事)

むしろ楽になる。

(和田和恵 氏)

産休入ったら2人入っちゃうみたいな。ラッキー感が必要なんじゃないかと思います。

(宮下知事)

なるほど。

(和田和恵 氏)

あと私の旦那は消防なのですが、正直、俺は育休取れない、というふうに言われています。実際1人でいると、やっぱり救急で人の命を預かる仕事なので、実際難しいところがあるのもなんとなく分かります。なので、さっきの教員と同じですが、やっぱりこう人を増やすっていうことをしないと。正直、仕事と子育ての両立っていうところにおいても難しいのかなと思っています。なので、産みたい人が産める。まあ結婚したい人が結婚できるとか、そういう青森県になってほしいなと思っています。私からは以上です。

(司会)

はい、和田さんありがとうございます。では最後、工藤さん、お願いします。

(工藤史子 氏)

こんにちは。自己紹介させていただきます。私は娘が2人いまして、1人は高校生、1人は大学生でもうだいぶ育児に関しては終盤かなというような感じです。この度は、県の医師会に所属していきまして、医師会の方から参りました。仕事は五所川原の方で、内科医で務めております。家は青森なので通っています。

医師会の方なので、医療系のお話をした方がいいのかなと思うことを考えてきましたのは、医師の男性医師の育休についてです。先日、八戸の市民病院に伺った時には、先生など、上の方の先生が育休についてすごく積極的で「どうぞお取りなさい。今取る人、これから取る人もいるんだよ」とお話してくださって、「10前年には男子の育休は非常識だと5年前には珍しいねと言われて、今ではすばらしいあと言われるんだよ。どうぞ取ってください。」と、トップの人の考え方によってだいぶ、取りたくなる気持ちが変わるのではないかなと、非常に感銘を受けて帰ってまいりました。

それからもう1つは、先ほど、越田さんのお話にもありましたけれども、不妊症・不育症に関することなのですが、不妊の保険の適用の部分なのですが、今の医療の最先端の医療がすごく進んでいますので、もし、そういったものを使うとなると、今まで保険適用でまかなわれたものも全部自費に変わってしまっていて全部自費になってしまうので、もっと進んだことしようと思っても、なかなかそういう自己負担では難しいというところと、あと不育症、せっかく宿っても、なかなか出産までこぎつけないという場合、流産した子どもさんの染色体は調べることができるけど、もっとそれ以上のものは調べるってなると、やっぱり自費になるので、それ以前の検査とかについては、やっぱりなかなか手をつけられないというような状況があって、不妊症と不育症について、ちょっとまだもう少し手を貸すところがあるんじゃないかなと、他の県では、そこに補助出してってこともやっぱりありますので、そういったところも考えていただければどうかと。

後は不妊不育に関してのカウンセラーですけれども、今はほとんど、産婦人科の先生がカウンセラーの役目を果たしております。その説明も他の診療時間の中で割いて行われているのが実情です。そういったカウンセラーの育成ですとか、先ほどもあった特別養子縁組も含めた説明もできるような、詳しいそのスタッフさんができることが必要なんじゃないかなというふうに考えております。

あとは、私の個人的な感想なのですが、私はもしかしたらレアケースかもしれませんが、つわりが非常に辛くて、つわりの期間中は、有給とかですね、職場の方の良心で、あの休ませていただいたということもあって、休業にはなれないのですね。心置きなくもし休むことができれば、今、うち子ども2人ですけれど、3人でも4人でも持ちたいなという気持ちがやっぱりありました。

それからファミリーサポートをだいぶ私も使った一人なのですが、子どもが熱を出すのは大体日曜日の晩とかですね。もう次の日のファミリーサポートには全然電話が繋がらない時にしか具合が悪くならないのですね。せめて土日祝をあけてもらうか、またはあの夜、連れて帰ったら熱があることがある。6時とか7時まで開けてもらう。そういった時間の融通が何とかありませんでしょうか？というのは、ちょっとしたお願いでした。

以上です。

(宮下知事)

大事なお願いだと思います。

(司会者)

それでは、知事からコメントをお願いします。

(宮下知事)

まず、みなさんからいただいた中で、私も思ったのは、育児の経験をキャリアなんていう話あったじゃないですか。まさに、その社会がそうになっていなくて、育児の期間、産休育児期間というのは、空白なのですよね。

なんとなくこう給料も、公務員ですら多分8割ぐらいになるのですか。良い会社でも8割ぐらいで。かえてそのあの農家さんとか自営業だと収入ゼロ。まあ何もしなければまあゼロということで行くと、まあそれってすごい落とし穴だな、とあらためて感じました。

でも、なんか世の中の人たちって結構冷たくて、結局休んでいるのだから、みたいな話とか。これもちょっと皆さんに怒られるかもしれませんが、私はその時に言ったのは、あの多少オンラインでも働いてもらったらいいんじゃない。みたいな話をね。それはちょっとまあそういう気持ちになる人もまあ、優しい方でもそう思うわけですよ。だから、それもちょっと違うのかなというふうに思い始めていますし。まして、世の中に対してプラスのことをしているという環境を、どう社会全体で評価するのかというのは、あえて今大事だと思いました。

田中さんがおっしゃっていただいたように、なんかこう、やっぱり世の中のマインドが、子育てが辛いとか、子育てはつまらないとかってなってはしないかって。本当に、私たちが政策的に

アプローチしなきゃいけないとかですね、っていうのは、これでやっぱ結婚に向かう若い人たち、まあ結婚じゃなくてもいいのですけどね。子どもを作るといふことに向かう若い人たちをどういうふうに、こう考えてもらう機会を増やすかってことだと思うのですよね。

子どもを産む、産まないは選択の一つだし、どういう人生を送るかの一つだから、産めよ育てよみたいな。そういう話ではないにしても、選択肢の一つとして、こういう素晴らしい選択肢もあるのだよということを、どうやって、やっぺいかなきゃいけないかは、確かにこう堅い議論だけじゃなくて、楽しんでいる、子どもとお母さんとで楽しく過ごしているという姿を、やっぺい世の中に、たくさんこう見せていかなきゃいけないとか、見てもらわなきゃいけないな、っていうのを、私も感じました。

和田さんがおっしゃっていただいた、すごく面白かったのは、やっぱりそういう場面になったら、妊娠したりしたら、休む場面になったら、先生が増えたとか、なんかボーナスみたいなことが、職場に起こるっていう発想っていうのは、今までなかったの。まあ、そうすると社会の祝福感がまた増してくるなっていうふうな話は、すごく感じますね。

最後、工藤さんがおっしゃっていただいた、預け先の日曜日の夜しか子どもは熱出さないっていうのは、いや、多分、決してそんなことはなくて。24時間365日熱出すのですけど、一番困るのはその場面で、多分、それがすごく頭の印象に残っていて、もうどうにもならないからっていう部分が多分あってですね、まさにそういう部分のサポートっていうのは本当に必要な、というふうにとちょっと感じてきました。

やっぱりこのキャリアとの関係でいくと、自分もすごく思い出とか、やっぱり男性ってダメなのです。ちゃんと考えられない。それはなぜかという、それこそ1、2年前ですね。本当に去年か、一昨年くらいに、コロナだったので、コロナっていういろんなことが起こるじゃないですか。

それこそ子どもの部局の女性課長の方にですね、5時15分までなのですね市役所は。5時15分なのですけど、5時10分ぐらいに、仕事を頼みに行ったのですよ。こっちだって急でるわけですよ。市長ですからね。急いでいて。

呼ばないだけましだったと思うのですけど、行って、いやあのちょっとこれ明日までって言ったら、えっ？みたいな顔するのですよ。だって普通考えられないですよ。一応、市長ですよ。課長にですよ。仕事で頼んだ後にえっ？っていうわけですよ。いやいや、結構えっ？いうけど。あの部長も隣にいますけど、まあ部長なんか今から？みたいな顔している訳ですよ。いや、今から。大事な話だったのです。まあなんの話かはさておき、とりあえず明日までにやらないと困る。しゅしゅ受けてもらって。

いや、私はね、何が起こったかわからなかった。これは例えば企画とか財政とかね、そういう男性の部局に行ったら、そんなこと絶対ないのです。でも、たまたまそこでしかできないことだったから、お願いしに行ったらそうで、次の日に、まあ、完成品が出来上がってきて、でなんかまあ一応ちゃんと全部スムーズに終わったんですが。

なんでさ、昨日ああいうちょっと態度悪かったの？みたいな話をしたら「いや、ちょっと考えてください。市長考えてください。だって私、もうあの時間から、もう子どもたちのご飯考えるし、この第二段階の仕事があるんです。一段目がやっぺい終わった時に、一段目の仕事を持って

くるってどういうことなんですか?」。仲いいから言ってくれた。

でもハッて思ったの。だから2倍働いていんのよ、実は。別に、それがどうこうっていうことじゃなくて、それがなんか当たり前の環境なっちゃっていて、じゃあもう、それ以来、4時過ぎしてから頼まないようにしています。

いや、でも本当にそういうことは、何が言いたいかという、本当にわからない、私たち。言われなきゃわかんないし、言われてもわかろうとしない人もいるし、何回言っても本当にわかんない人もいるので。だから、やっぱ皆さんの視点っていうのは、今日いただいたいろんな視点っていうのは、本当に大切にしていきたいというふうに思います。

この後どうやって進めるのですか?

(司会者)

あとは意見交換10分くらいあります。

(宮下知事)

ということで、まずは、私からそのように伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。

(司会者)

ありがとうございました。

それでは貴重なお時間なので、皆様からは是非、知事に伝えたいこととか聞きたいこととか、10分程度あるので、せっかくの機会です。どなたか? はい、どうぞお願いします。

(田中綾乃 氏)

なんか今のお話をお聞きして、ちょっと一つだけ思ったのは、いろんな場所でも、男性はちょっとわかってなくて、今日この場とかまさに女性ですけど、ちょっとそぐわないかもしれないけど、男性がダメでっていうこともないと思っていて、多分どの家庭も、家庭をすごく優先したいという気持ちを持っていらっしゃる方は多いと。

その家族の形がどういう形であっても、優先したいと思っている方は多いと思うんですけど。家庭によっては子どもを大事にするっていうことが、旦那さんが思いっきり働くことだったりとか。だから、ワンオペを選んでいるっていう家庭もあって、私とか良くワンオペで3人見ることが多いんですけど、でもそれは家庭にとって、それが良い選択だと思っしている。

だけど、よその家庭ってやっぱり、どうしても比べなくていいって言われても、あそこは旦那さんが毎回参観日に来ているとか、家事をやってくれているとか、多分しんどくなるのって、比べてしんどくなっていると思うのですよね。他にも問題はありますが、だけど、そういう選択肢はちゃんと与えられていて、なんかその中で、夫婦で話し合いをして選んでいるっていう実感があれば、多分納得感って得られるのですよ。

それを得られるようなコミュニケーション取る時間がまず作れない、捻出できないというのが問題で、そういうために、その育児休暇っていう期間が私の家では意味があったし、それでなく

でも、ちゃんと週に1回でも定時に帰ってきて子どもの話ができるとか、やっぱりそのコミュニケーション不足っていうのはすごく大きいかなと。男の人も頑張っているから、わかってないっていうよりかはコミュニケーションだと思います。

(宮下知事)

いや、本当にね、コミュニケーション不足で、コミュニケーションどっちから取るっていうことも大事だけど、やっぱり私はですね、それでもわかってないと思う。というのは結果が出てないの。

この要するに合計特殊出生率ということについても、もう散々議論しても、データ揃って、データに基づいているんなことをやってねっていう話をしているけど、なんの結果も出てない。結果を出せない一番の分野になっている。結果を出せない一番の分野になっているのは、私たちには結果をだせないんだもん、産めないから。

その本質的な違いっていうのがあって、コミュニケーションで乗り越える部分もあると思います。で、えっと今回は女性達だけっていうことになりましたけど。これからワークショップとか、様々な展開の中では、当然男性のといつかね、あのみんなの意見を、より多くの人たちの意見を聞いていくという形を取っていくと思うのですが、やっぱりなんかこうわかってないんだよな、っていうか、自分がわかってないんだよ。わかろうとしても、さっきの例は、わかろうとしているのに実はわかっていなかった、っていう例だし、自分だけの話じゃなくて。うん、やっぱりそう思うのですよね。

確かにコミュニケーションがそれを解決できて、コミュニケーションの時間があれば、それが解決できるということもその通りです。それは家庭レベルだけでなく、職場レベルでも地域社会レベルでも、コミュニケーションが必要だっていうことはあるんですけど。ただ、やっぱりこう軸足ベースで言っても、わかってないと思うんだよな。

色々この話をすると永遠になんか。私はそう思っている。

(田中綾乃 氏)

男性がそう思ってくださっているってことは、すごい。多分、みんなありがたいじゃないですか。

(宮下知事)

ありがとうございます。いいまとめをしていただきました。

(司会者)

はい。まだお時間ございますが、みなさんいかがですか？

(宮下知事)

ええ、どんどん。言ったもん勝ちだよ。

(司会者)

亀山さんお願いします。

(亀山瑠香 氏)

ありがとうございます。長くならないように話したいと思います。あの先ほどのお話、皆さんから聞いていたのですけれども、確かにあの、女の人扱っていて、仕事では男の中にいつも1人という状態だったりとか、そういう場面多いのですけど、お互い、あのやっぱり男性は男性で、多分、遺伝子的にわからないのだと思うのですよ。

でも、だからそれを尊重してあげればいいと思っていて、コミュニケーションはもちろんだと思うので、そのコミュニケーションをとった上で、でもどうしても、私たちも男性のことをわからない場面って多いじゃないですか。

なので、単純に、尊重し合えれば、やれるところはやる、やれないところはやれない役割分担がうまくできる。ようなくらいの、コミュニケーションがあればいいんじゃないかな、っていうふうに思いました。ありがとうございます。

(司会者)

はい、ありがとうございます。小山さん女性のキャリアについてのご提案あったと思うんですが、女性のキャリアが中断されないような、子育てのキャリアについてお話なさったと思うのですが、その辺はもうちょっと聞きたいなって。個人的にお願いしたいです。

(小山悠里 氏)

キャリアって、ずっとやっぱり繋がって行って、とくに30歳前後って皆さん大人になってきて、社会的にできることも増えてきて、社会でまかせられる仕事も結構重い仕事になっていくあたりで、子どもを考え出す人って結構多いと思うのですね。

だからこそ、そこで中断したくないっていう私の場合、同級生とかもそうなのですけども。やっぱりそこで中断することによって、人にも迷惑かかるし自分のキャリアを見た時に、この空白のところ、同じように伸びてきたけど同じように、またその地点に戻してもらえるかっていうと、そういうわけではないのが、今の社会です。

なんでこう、履歴書には育児経験が書く欄がないのかなと思うくらいなのですが、育児経験があったことによって、自分自身が得られるものというのは結構多いと思うのですよね。ほんとに社会全体のことが見えるようになっていたりとか、本当に感情のコントロールもそうですけれども、若い子にどういうアドバイスをしてあげたらいいかっていうのを、私はやっぱり育児を通して、得られる部分もあったかなと思っていたので、組織において、確かに、こう育児していると、子どもが風邪ひくと私も、会社には迷惑をかけたり、ニュース変わってもらってフォローしてもらったり、たくさんしてもらっているのですけど。

会社にいろいろ苦勞をかける部分があるかも知れないのですが、ただ社会全体として、それでも次の世代を産み育てているのだというキャリアを、そういう経験を一つのキャリアとして、

考えてもらえるような社会になってほしいと思っています。

(宮下知事)

やっぱりあれなのでしょうね。いろんなことへの配慮が必要で、結婚しない、子どもは必要ないってのはあれですけど。仕事をちゃんとしたいっていう人たちの配慮というか、そういう人達もやっぱり一方でいて、選択として、結婚して子どもを産み育てて、それもまあ、一つのキャリアだというふうに考えてほしい。

会社の経営者とかのその目線感で、私は、目線感って、まあ一般論でいくと、やっぱりちゃんと働いている人たちのほうがプラスに見える。ということがやっぱりそこに多分わだかまりというか、そういうのがあるのでしょ。考えてみると、やっぱりそれもちよっと頭が硬くて、頭柔らかくして考えると、いろんなことの学びは、仕事にもいきるといえるか、思えなくもない実際そんな気がしますよね。

だから、そこをこう、世の中、社会やそのまあともかく会社がね、どういうふうに評価するのかが大切なことですよ。

なんかなんとなく、小山さん、あれじゃない、NHKなので、最初にそういうのはスタートしたらいいんじゃない。

(小山悠里 氏)

私のこの視点を、ひとつ活かしたコーナーを担当させてもらっているんで、そこに関しては、今日もいろいろ勉強させていただいていますけど、自分の仕事に、ゆくゆくは放送に乗せて、いろんな人に浸透するように生かしていきたいと思います。

(司会者)

はい、ありがとうございます。

他に皆さんございませんか？ はい、種田さんお願いします。

(種田英里香 氏)

私は今みたいな感じじゃなくて、せっかちなので、あのリアルなところ聞きたいと思うんですけど、まあ、今みんなから出た意見が、どれくらいで実際に反映されて政策になるのかなって気になっていて、今、私は本当に車が欲しいです。子どもももうひとり、できればほしいと思っていますので、リアルに実現可能なのって、いつからなのかなって、よろしくお願いします。

(宮下知事)

えっとですね。何をいつからっていうのはなかなかあれですけど、ここで出た意見というか、まとまった意見というか、まあ皆さんから頂いた意見は、基本的に全部やりたいと思っています。精査して、これはやる、やらないってことではなくて、今、9月にいろんなことをやるってことも、もちろん一つはあるでしょうし、来年度から始まることもあるでしょうし、再来年度からや

ることもあるし。少なくとも、私4年間という期間があるので、まあ4年間の中では少しずつ取り組んでいきたいなというふうに思っています。

その3人目100万を明日からやりますか、とはこの場も言えないので。またそういうことも皆さんにお伝えしながら、しっかりやっていきたいと思えます。

できれば、この後、どういうふうに進むのかわかんないですけど、集まれっていうのも結構みんな大変だと思うので、例えばオンラインとかですね、チャットとかですね、そういうなんでも意見交換ができるような形にしたいと思うし、あと、テーマをちゃんと決めてね。

例えば無償化だったらどういうことからやったらいいとか、あるいは、預け先だったらどういうところからスタートしたらいいとか、今日出た、そのキャリアの話ですよ。というのはどういうふうに進めたらいいとか、まあそういう風なことは、テーマ別に皆さんと意見を聞いて、それも進めていきたいというふうに思っていますので、今日言われて今日やりますっていうのは、なかなか言えないですけど、順次やっていくと思うので、少しずつ良くなっていくのは、お母さんが頑張ったからだよって子どもたちに言えるように、私も取り組んでいきますので。はい、よろしくお願ひします。

(種市さん)

車はまだ買わないでおきます。

(司会者)

皆さん、ありがとうございます。それでは意見交換の時間は一旦ここまでとさせていただきます。貴重なご意見、育休などについてのご意見がすごく多かったのかなと思います。いろいろ持ち寄っていただきまして、ありがとうございます。

(司会者)

それではここで、知事から閉会のご挨拶をお願いいたします。

(宮下知事)

今日は自己紹介がてら、皆さんまず第1回目の意見ということだったと思いますので、1人5分で言い切れないことがたくさんあったと思います。

それぞれの、個人的なというか、それぞれの子育てに関する想いと、それぞれの背景にある職場との関係とか、あるいは地域との関係とか、ということはあるのだと思います。

で、これからさっき言ったように、皆さんから頂いたのは、基本的には全部やりたいなっていう思いと、段階的に順次進めていきたいなっていう思いがあります。

そういう中でも皆さんから意見を聞いていきたいということはあるんですが、まあ何よりも、やっぱり会として、こうやっぱり楽しく進めていきたいなという部分もありますので、是非ですね、これからも積極的に参加していただいて、テーマごとに皆さんから意見みたいな、あるいはワークショップごとにも、意見をいただくということで、考えていただければなと思います。

で大事なものは気軽に來ていただいて、率直な意見を言っただけければと思います。よろしく

お願いいたします。今日は、本当にありがとうございました。

(司会)

それではこれをもまして、令和5年度第1回目の青森県こども未来県民会議を閉会いたします。第2回の会議は、12月に開催予定してございます。

今回皆様からご発言いただきましたご意見は、これから県内各地で開催するワークショップなどを通して、内容をとりまとめ、今後の少子化対策の方向性について、皆様と議論を深めてまいりたいと考えてございます。

メンバーの皆様には引き続きご協力賜りますようどうぞよろしくお願い致します。

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございました。お疲れ様でした。

(宮下知事)

「少子化対策」っていうのはもうやめたほうがいいと思うな。つまり、その、子どもを産まなきゃいけないっていうプレッシャーっていうことじゃなくて、やっぱり子育て政策として、なんかこう子どもたちが健やかに成長するっていうことを、どうサポートするかっていうことに着目した政策を立案する。

で、その過程で親はどうサポートするか。そして世の中全体が、どうそこを中心に進化していくか、っていうかそういう姿が描けるようになればいいと思っていますね。

少子化っていうと、人口戦略とか、そういうこと言うといきなり、なんかまたね、自分たちと全然関係ない世界になっちゃうので。ぜひ皆さんどうぞよろしく願いします。本当にありがとうございました。

(終了)